

堀内昌郷『葵の二葉』の成立過程管見

妹尾好信

はじめに

伊予国和氣郡興居島に住した国学者堀内昌郷(寛政三年(一七九二)一弘化三年(一八四六))は、『葵の二葉』と『底の玉藻』という二つの大部な『源氏物語』評論の書を書いた。ごく大まかに言えば、前者は対照比較による登場人物優劣論が主であり、後者は物語内の出来事と史実との類似を挙げて準拠論を展開したものである。近世的な倫理観に基づく教誡説を基本としているため、今日的にはあまり評価が高くないが、従来の勸善懲惡説や、当時大きな影響力を持っていた本居宣長の「もののははれ」論にも批判的な立場に立つた論として興味深く、何よりも、江戸や京・難波から遠く離れた伊予国の離れ島にあつて、『源氏物語』に魅せられ生涯をかけて深く吟味探究した昌郷の努力と功績は特筆に値するものがある。

従来、両書ともに京都大学文学部研究室蔵の写本が唯一の伝本とされてきた。ところが近年、昭和六十一年末に堀内家から愛媛大

学附属図書館に寄託された同家の蔵書の中にこの二書が含まれていることがわかつて、大いに注目されたのであつた(福田安典氏「新出『葵の二葉』『底の玉藻』及びその周辺資料について」『詞林』第二十六号 平成十一年十月)。そのうち、『葵の二葉』については、福田氏を中心とする愛媛近世文学研究会の手で全文が翻刻刊行された(『源氏物語評釈』『葵の二葉』翻刻)平成十六年一月、風間書房刊。以下、『翻刻』と称する。これによつて、それまで一般的には昌郷の息匠平の手で刊行された簡略版である『源氏物語紐鏡』でその要点を知ることができなかつた『葵の二葉』の全貌を容易に目にするできるようになつたのであり、まことに意義深いことである。

福田氏は、先の論考ならびに『翻刻』付載の「解題」において、『葵の二葉』の成立について詳しく考証されている。その結果、次のような九段階にわたる成立過程を想定された(項目の頭に付した番号は稿者による)。

①草稿・メモ段階

←←

②昌郷、『源氏物語評論書三十卷』成立

(或いは『秋の雨夜』十八巻と愛大本『底の玉藻』十一巻をあわせた二十九冊をおおまかに三十巻としたか)

←←

③天保十一年四月以前に藤井高尚に提出。二つに分けられ、『葵の二

葉『底の玉藻』と命名

←

④天保十一年四月、『秋の雨夜』を訂正

←

⑤天保十一年八月、訂正版『秋の雨夜』を浄書して京大本『葵の二葉』成立。同時に京大本『底の玉藻』成る

←

⑥天保十四年九月、『葵の二葉』完成（刊本『源氏物語紐鏡』底本）

←

⑦安政四年九月、匡平、愛大本『葵の二葉』浄書

←

⑧安政五年十月、『紐鏡』草稿成る

←

⑨安政六年秋、『紐鏡』刊行

福田氏の考証は、新出の愛媛大学本『葵の二葉』をはじめ、堀内家寄託の蔵書中の資料類を駆使し、あわせて従来知られていた京都市大本『葵の二葉』ならびに刊本『源氏物語紐鏡』の序文や本文中の記事の丹念な解読を通してなされたもので、複雑な成立過程を簡条書きに整理して明快に提示された。これによって『葵の二葉』の成立事情に関してはほぼ解明されたと言つてよいが、なお少しばかりの修正が必要なものにも思われるので、本稿では、福田氏のこ

究の驥尾に付しつつ、若干の私見を提出してみようとするものである。

一 京都大学本と愛媛大学本の関係

福田氏の「解題」によれば、既存の京都大学本は「堀内昌郷筆天保十一年写」であるのに対し、新出の愛媛大学本は「堀内匡平筆 安政四年写」であるとされる。まず重要なのは、京都大学本は十八卷十八冊（巻一のみ上下に分かつ）で巻十一を欠いているが、愛媛大学本は十八卷十九冊の完本なので、京都大学本の欠を補うことができることであるという。

京都大学本が昌郷の筆であると福田氏が認定されたのは、柱に「松蔭書窓」（松蔭は昌郷の号）と刷られた料紙が昌郷の専用用紙であることと、「巻」の字の書き癖など筆蹟の特徴によるとされ、これは従うべきであろう。天保十一年（一八四〇）写というのは、最終巻十八の末尾に、「かくさまにものせし説どもを人々はいかに思ふらん、そはしられねど一わたりはとて、天保の十とせあまり一とせといふ年の卯月の頃ふでとりてかきけるものは、梓ゆみ伊予国としのほにも、えさしそふ松やまの千代のみかげにかくれすむ堀内昌郷」（説点・濁点は私に付した）との識語があつて、そこに年時の記載があることによる。すなわち、京都大学本は、著者堀内昌郷自筆のオリジナル原本ということになる。同本には「朱による補入、ミセケチなど多数見られる」（伊井春樹氏『源氏物語注釈書・享受史事典』（平成十三年

東京堂出版「葵乃二葉」の項」というが、それは成立後に推敲・訂正が加えられた跡であろう。

これに対し、愛媛大学本は、第一冊（巻一上）巻頭に置かれた京都大学本にはない長い序文の末尾に、「安政の四とせといふ年の長月ばかり後の松蔭のあるし 堀内雅郷」とあることから、安政四年（一八五七）九月に昌郷の息匡平（雅郷）はおそらく匡平の別称であろう）によって書写された本と認められるのである。ただし、匡平が書写したのは父昌郷筆の京都大学本によつてではない。福田氏は、愛媛大学本は「京大本と比較すると、記事や文辞に異同と出入りがある」こと、そして、「愛大本は完成形態に近い本文であることが推測できる」と指摘しておられるが、愛媛大学本の巻十八末尾には京都大学本にある先に引いた識語がなく、「天保十一年八月 伊予国人 堀内昌郷」と、年時と署名のみ記されているのである。そして、その年時は、京都大学本の「天保の十とせあまり一とせといふ年の卯月の頃」から約四ヶ月か月後なのである。この違いは何を意味するのだろうか。

おそらく昌郷は、四月頃に「一わたりはとて」書き上げた『葵の二葉』（すなわち京都大学本）に引き続き手を加え推敲して、八月までに修訂版『葵の二葉』を完成させたのであろう（この本は伝存が知られていない）。匡平はその修訂版を底本として、自らの序文を加えた校訂本を、父昌郷の没後十一年を経た安政四年に作成したわけである（すなわち愛媛大学本）。京都大学本にある補入やミセケチ訂正が愛

媛大学本の本文にどのように活かされているかを詳しく調査してみないと確かなことは言えないが、京都大学本と愛媛大学本との関係は、おそらくそういうことだと考えられる。

匡平は父昌郷の遺著『葵の二葉』の定本を作成するべく、安政初年頃からその校正作業に従事していた。そのことは、匡平が刊行した『源氏物語紐鏡』末尾に置かれた安政五年十月の奥書に「さいつごろよりの本書（稿者注）『葵の二葉』の（こと）を校正せるついでに」云々とあることによつても明らかである。この「校正」作業によつて成ったのが匡平校訂本『葵の二葉』であり、すなわち愛媛大学本なのである。

二 匡平校訂本『葵の二葉』の製作意図

さて、匡平が亡父昌郷の遺著『葵の二葉』の校正を行なった動機やいきさつについては、愛媛大学本の序文にやや詳しく記されている。『翻刻』により、序文最終段の記述を引く。句読点・濁点を私に改め、引用符を加えた。

此書ども一わたりかきとちめて藤井翁に見せまめらせしに、「いとめづらかに考へ出たり」とて、いたくめでられしが、やがて『葵の二葉』『底の玉藻』と名づけられたり。さて後、猶いかにぞやあかず思ふふし、あるをひきなほさむと思ふく、年月を経るまに、いとなく身をいたづきがちになりて、つひに其事しはせずなりぬ。

この部分は、昌郷の述懐を記したものとと思われる。「此書ども」というのは昌郷が『源氏物語』に関して自らの見解を詳しく書き綴った書冊で、『源氏物語紐鏡』に記す昌郷自身の言によれば「三十巻ばかり」あったという。これを「藤井翁」すなわち藤井高尚に見せて批評を乞うたところ、絶賛されて、全体を二つに分けて「葵の二葉」「底の玉藻」と名付けてくれたと言っている。このことは『源氏物語紐鏡』にも記されていて、高尚は「其よしをまろはしがきにものせむ」と、序文を寄せようとまで言ってくれたようだが、高尚の死去（天保十一年八月十五日没）によりそのままになったという。その後も昌郷は『葵の二葉』の改訂を行なおうと思いつけていたが、病気がちになってとうとうそのことをし遂げずじまいになったという。以下は、匡平の思いを記した箇所である。

思へばいと口をしのわざや。などて委しくおのれにいひおかざりけむ、己れも父にとひおかざりけむと、すぎし昔の今さらにとりかへさまほしきも、せむすべなし。さるを、いかなるたよりもてか、かたはし聞伝へて見まほしくする人のこれかれないで来て、こひにおこせなどもするを、さうじ身のいかにぞや思ひしことのあるまゝならむはあかぬわざと、なき人のためつゝましくて、此程までは、かにかくいひ、すまひつゝすぐし来ぬれど、中にはせちにとそゝのかすかたもありて、今はいといなびがたく、いでさらばとて、己れおほけなくも思ひおこして、父が今はの際にいさゝかひひのこしゝ事などあるを、さる限りは

皆こたひ巻々をあらためて、大かた其いひし意に糺しゝかど、猶え聞ざりし事のおまたならむを、今は忘るべきよしなければ、さてやみぬ。いとあたらしきわざなりや。あはれ、ものよくしれらむ人の、此父が考へをうべなふ心のあらむには、猶よくとひはかりてつきくものせむとは思ふものから、今しばしくてあらむとするにつきては、其よし巻の初めにいさゝかかくなむ。（以下略）

父の遺志を継ぎたいという思いを強くした匡平は、生前父に『源氏物語』のことを十分に問い聞かなかったことを悔やんでいたが、どこから聞いたのか『葵の二葉』のことを耳にして見たいという人が時々現れ、貸与を申し出る人もある。著者である父自身がまだ十分だと思っていた箇所のあるままで人に見せるのは不満だろうと、亡き父に遠慮して断ってきたが、熱心に乞う人もいるので断り切れず、それではというので一念発起して、亡父が今はの際に言い残したこともあるのを、だいたいそれに合わせて記述を正した。それにしてもまだ父から聞かなかったことも多々あろうけれども、それはどうしようもないのでそのままにした。惜しいことである。と、そういう内容が書かれている。

これからわかるのは、この愛媛大学本『葵の二葉』は定本をめざしたものではあるが、かなり匡平によつて増補の筆が加えられているらしいことである。これに関しても、今後、京都大学本との詳しい比較研究をすることによつてその増補の実態が解明されるであろう。

うと思う。

そして、もうひとつ想像されるのは、匡平はこの定本『葵の二葉』をそのまま出版したいという望みを抱いていたのではないかということである。多くの人が父の遺著に関心を持って欲しているとか、父の考えに賛同する人に相談して続編を作りたいとか、この書が広く読まれることを望んでいる様子が記述のはしはしにうかがわれる。

生前、昌郷は藤井高尚の序文を得て、おそらくその口利きで『葵の二葉』が出版されることを期待していたのではなかったろうか。

それは高尚の死去によつて実現せず、やがて昌郷自身も亡くなつてしまつただけけれども、匡平は父の思いを自分の手でかなえたいと願つたのではないかと思う。それは、安政六年（一八五九）に『源氏物語紐鏡』を出版していることとも関連していると考えられる。愛媛大学本『葵の二葉』は、匡平の特徴的な筆蹟で見事に浄書されている。この筆蹟は『源氏物語紐鏡』のそれと同じものである。『源氏物語紐鏡』が一面十行書きであるのに対し、愛媛大学本『葵の二葉』は十二行書きという相違はあるが、ともに匡郭を備へた同様の書式である。おそらく匡平は、いずれそのまま版下とするつもりでこの校訂本『葵の二葉』を丁寧に浄書したものとと思われるのである。

三 簡略版『葵の二葉』と『源氏物語紐鏡』

『源氏物語紐鏡』は、大部の書である『葵の二葉』と『底の玉藻』を大幅に簡約して、わずか三十七丁の一冊本にまとめたものである。

著者は匡平であり、「匡平は、父昌郷が著した『葵の二葉』『底の玉藻』の二書をもとに、それを簡約したもの」（『国語国文学研究史大成』4『源氏物語下』（昭和三十六年、増補版昭和五十二年 三省堂））というように、匡平が縮約作業を行なつたと理解する説もあるが、「昌郷が葵の二葉の要領を記したものに、その子匡平が解説を加へたものである」（重松信弘氏^{増補}『新放源氏物語研究史』（昭和三十六年、増補版昭和五十五年 風間書房））というのが正しい。そのあたりの事情は、同書末尾の匡平の跋文に詳しい。少々長くなるが、以下に、私に句読点・濁点・引用符を付して引用する。

こは、今よりはたとせばかりあなたに、父のものせし『葵の二葉』といふ書ありて、其後またことにかきおきしものなるを、いとあまりにことずくなにて、ことのさまによりてはその意のふとさとりぐるしき所もあれど、そは本書あればさてありぬべしとて打やりたるに、其本書のかたは巻数もいと多くて、一わたりよみわたさむにさへいとまいれば、其説のあるやうを大よそに見むには、かくかいつまみに短くかきとりたるかたぞよろしかるべきと思ひて、をりく其本書を見まほしといふ人のあるに、まづこれをものせむとするにあはせて、このころまたある人のもとより、「いかでかの葵をすこしづくだにつみ出で、ひろく人にも見せばや」といひおこせければ、やがてこれを見せたるに、「かうやうのものゝありしこそいとうれしけれ。しかはあれど、かくてはあまりにあらくて、見む人のたどくしから

むと見ゆるふしもあれば、今すこし委しきかたにとりなほして」といふに、なき後のさかしらはいとあるまじきわざなりとは思ふものから、かの人のいへることもいなきがたさに、しひて思ひおこして、さいつころよりかの本書を校正せるついでに、そをひき合せて、所によりては其文をさながらつみいで、或はあまりにこと長きはよき程にとりちぢめなどして、ことの意の聞えやすからむやうにと、こゝかしこにかきいれたるになむ。かくいふは、安政の五とせといふ年の神無月ばかり、昌郷がまな子、後の松蔭のあるじ、源匡平。

冒頭にある「今よりはたとせばかりあなたに」は『葵の二葉』の成立時を言つており、天保十一年（一八四〇）のことだから、安政五年（一八五八）から数えると、正確には足掛け十九年前ということになる。その『葵の二葉』を「其後またことにかきおきしもの」があらつて、それが『源氏物語紐鏡』のもとになつていくという。すなわち、昌郷は、『葵の二葉』とは別にその簡略版を自ら作つていたのである。それはいつのことかという、この跋文の直前にある。

天保十四年九月

伊豫國

堀内昌郷

という年時と署名がそれを示していると思われ、天保十四年（一八四三）九月のことだと考えられる。この昌郷編の簡略版をもとに、匡平が、原典『葵の二葉』を引き合わせて、「所によりては其文をさながらつみいで、或はあまりにこと長きはよき程にとりちぢめなど

して、ことの意の聞えやすからむやうにと、こゝかしこにかきいれたる」ものが『源氏物語紐鏡』なのである。具体的には、匡平が書き加えた部分は本文中の一字下げになつた部分であるようである。

匡平がこの簡略版『葵の二葉』の増補改訂版作成を行つたのは、「ある人」が「いかでかの葵をすこしづゝだにみ出で、ひろく人にも見せばや」と言つてきたことがきっかけだと言ふ。すなわち、『葵の二葉』の出版話を持ちかけてきた人がいて、その人に簡略版を見せたところ、これでは簡略に過ぎてわかりにくいので、もう少し詳しく書き直してほしいとの要請を受けたためなのである。

そもそもは『葵の二葉』を少しずつでも出版したいという話であつたが、簡略版の補訂版を作つてそれを出版することになつたといふいきさつがわかる。しかしながら、前述した通り、この跋文に見えるごとく匡平はこの頃『葵の二葉』の校正作業を進めており、おそらくはそれを出版したいという思いも、匡平の心中にはあつたものと考えるべきだと思ふのである。

四 『源氏物語紐鏡』刊行前後の匡平

以下は、すべて福田安典氏のご教示による資料³のだが、『源氏物語紐鏡』刊行の年である安政六年（一八五九）の四月から七月の頃、匡平は上京しており、その間の日記が愛媛大学寄託の堀内文庫に所収の『堀内匡平日記』の中に残つてゐる。それを見れば、まさに『源氏物語紐鏡』の刊行前後の匡平の動向がよくわかつて非常に興味深

いものがある。

上京の目的の第一は、『源氏物語紐鏡』出版の最終校正と出来を見届けることであつたらしく、跋文の校合を行なつたという記事（五月十二日、十三日条）も見える。在京中、匡平は精力的に人と会つて、典籍や文献資料類を見たり、書肆から購入したり、また借り受けて校合したりしている。谷森善臣（伴信友門）、河喜多真彦、城戸千楯（本居宜長門、書肆惠比寿屋主人、権田直助（平田篤胤門）、近藤芳樹（村田春門・本居大平・山田以文門）らの国学者たちと交流し、歌人の太田垣蓮月なども会つてゐる。忙しくも充実した京都滞在であつたようだ。福田氏は、河喜多真彦が『源氏物語紐鏡』を出版するに際し労を執つた」とされ、「近江屋佐太郎」という書肆（書林、弘文堂）に出入りしていることから、『源氏物語紐鏡』の出版もあるいはこの書肆もしくは（略）城戸千楯に依頼したか」と言われている。

六月になると、『源氏物語紐鏡』の初刷りが出来たようだ。「谷森へ紐鏡を贈」（六月十六日条）、「真彦を訪ひ紐鏡を贈」（同）、「紐鏡を城戸へ送」（六月二十三日条）、「近藤芳樹を訪。紐鏡持参」（七月十三日条）などとあつて、あちこちに送つたり持参したりしていることがわかる（城戸へ送」とあるのだから、千楯が版元というのではないようだ。待望の出版が実現して嬉しくてたまらない匡平の様子が目に浮かぶようだが、こうして刻成つたばかりの『源氏物語紐鏡』を配りながら、匡平は、次にはその親本である『葵の二葉』の出版のことも意識していたのではなからうか。前述のように、『源氏物語紐鏡』

出版話のきつかけは『葵の二葉』に関心を抱いた人がすこしずつでも世に出さなかつたかど勤めてくれたことであつたわけで、やはり匡平は亡き父が全身全霊を込めて打ち込んだ『源氏物語』研究の一大成果である『葵の二葉』を最もあるべき形で出版することを願わなはずがない。この上京中に、錚々たる文化人たちに会つて交誼を結ぶことに努め、彼らに『源氏物語紐鏡』を贈つたのも、まずは父の『源氏物語』研究の簡要を見もらつてその意義を理解してもらふことで『葵の二葉』の刊行に關して力添えを得たいという思惑があつたからだろうと勘ぐられるのである。ことによると匡平は、前々年九月に浄書完成した増補改訂版『葵の二葉』の原稿をもひそかに携えて上京してゐたのではないかと想像される。

あまりに大部なので多くの読者を得ることは難しいとは承知の上で、匡平は亡き父が今では際まで考え続けた『源氏物語』研究の成果である『葵の二葉』と『底の玉藻』の二書を自らの手で校訂して世に送り出すことを息子である自分のつとめだと考えていたのではないだろうか。

しかし、残念ながら、『葵の二葉』はついに匡平の生前に刊行されることがなかつた。膨大な分量ゆえ書肆が刊行に二の足を踏んだのだろうと思われるが、それに加えて、実は匡平は安政四年九月浄書の校訂本も定本として満足してゐなかつたということも出版を見送つた理由ではないかと考えられる。これも福田氏が紹介された資料³だが、元治元年（一八六四）に松山藩を批判して牢に繋がれた折に記

した『匡平獄中日記』によれば、「父の志をつぎて其遺言のまゝにせんとおほけなく思ひおこして、此年頃は万のわざを打すてゝ其事のみに打かゝりてあるに、巻の数もいと多く、はた見合すべき書も種々にてはたやすからぬまゝに、思はずも年月をかさぬれど、『いかで己が命の限は露たやまず』とをゝしく思ひはげみて、唐人の寸陰を惜むとのいへる如く、夜ひるとりまかなひてありつるに」云々とあつて、安政六年以後も匡平は生涯の仕事として父の遺著の校訂整備に取り組んでいたことが知られる。その執念には畏るべきものがあるが、完璧性を追求する性格ゆえ、とうとう二著ともに刊行を見ることができずじまいになつてしまつたのではないかと思ふ。

おわりに

以上、堀内昌郷著『葵の二葉』の第一次成立から、子息匡平による増補校訂作業のあとをたどつてみた。その結果、私見によれば、最初に掲げた福田氏が示された成立過程の流れを次のように改めることができるのではないかと考えるのだが、いかがであろうか。福田氏のご研究から得た学恩に感謝するとともに、大方のご批評を乞いたい。

①草稿・メモ段階

←

②昌郷、『源氏物語』評論書「三十巻ばかり」を作る（おそらく登場

人物対比論「秋の雨夜」十八巻と続編の準拠論（愛媛大学本「底の玉藻」）十一巻を併せた全二十九巻の書）。

←

③天保十一年（一八四〇）、昌郷、先の「三十巻ばかり」の書を藤井高尚に見せる（堀内文庫本「源氏物語秋の雨夜」）。その内容を賞賛され、二つに分けて『葵の二葉』『底の玉藻』と命名される。

←

④天保十一年（一八四〇）四月、昌郷、藤井高尚閲覧の本を基に第一次『葵の二葉』を作る（京都大学本）。この頃、『底の玉藻』（京都大学本）も成立か。

←

⑤天保十一年（一八四〇）八月、昌郷、第一次本を推敲・訂正して修訂版『葵の二葉』を完成。この本が後に匡平校訂本の底本となる。

←

⑥天保十四年（一八四三）九月、昌郷、簡略版『葵の二葉』（おそらく「底の玉藻」も併せて）を作成（刊本『源氏物語紐鏡』の基となる）。

←

⑦安政四年（一八五七）九月、匡平、増補校訂本『葵の二葉』（愛媛大学本）を完成、浄書。

←

⑧安政五年（一八五八）十月、『源氏物語紐鏡』成立（跋文）。

←

⑨安政六年（一八五九）正月、『源氏物語紐鏡』序文（菅原長好・鳥谷美教）、同年六月刊行（堀内匡平日記）。

〔注〕

(1) 『翻刻』の福田安典氏による「解題」に記されるところによれば、堀内文庫には天保十一年（一八四〇）の跋文を持ち『源氏物語秋の雨夜』と題する昌郷筆の写本があり、跋文には「ゆかりまがはぬぶぢ井翁に」とあるので、これは昌郷が藤井高尚に閲覧を乞うた時の本であることが知られる。後に昌郷は跋文に朱を入れ、「ゆかりまがはぬぶぢ井翁に」の部分で、「人の定めてんとて、天保十とせあまり一とせといふ年の卯月の頃」と訂正、さらに貼り紙で訂正を加えて、京都大学本『葵の二葉』の跋文と同じ形に直されているという。福田氏は、「原形態『秋の雨夜』は恐らくは天保十一年以前の秋日に成り、京大本『葵の二葉』は天保十一年の四月から起筆され、その数ヶ月後に成立したのである」と考えられている。私は、天保十一年四月は第一次『葵の二葉』（京都大学本）の成立時をさすと考えている。また、『秋の雨夜』という書名が付けられたからと言って、秋に成立したとは限らないであろうと思う。

(2) 昌郷は弘化三年（一八四六）正月十五日に没するが、臨終間際、枕元に鳥谷美教を呼び、自らの『源氏物語』研究を回顧してその志半ばであることを悔やみ、遺言として『源氏物語』に関する見解を四項目にわたって述べたという。美教はそれを書き留め、『源註遺言』として

まとめている。福田安典・山中雅代氏「堀内昌郷『源註遺言』について——天保期の源氏物語研究者の動向——」（『詞林』第三十八号 平成十七年十月）に翻刻がある。

(3) 福田氏は「翻刻」の「解題」において、天保十四年九月は、昌郷による改訂版『葵の二葉』の成立時期だとされ、「安政五年十月に『紐鏡』を編む際に定本に採用したのは、天保十一年八月に完成した京大本でも愛大本でもなく、天保十四年九月に完成したB系統の跋文を持つ散逸した『葵の二葉』であった」と説かれるが、私はこれを昌郷が作成した簡略版『葵の二葉』（+『底の玉葉』）の跋文だと考えるのである。

(4) シンポジウム「鄙なる地の源氏物語研究——この物語はいかに愛されたのか——」（平成十六年二月二十八日 於愛媛大学）における発表「堀内家および伊予の源氏物語研究について」のレジュメによる。

(5) 注(2) 掲出の福田・山中論文に、「昭和十一年景浦直孝「堀内匡平伝」より」として引用されている。

〔付記〕本稿は、平成十六年二月二十八日に開催されたシンポジウム「鄙なる地の源氏物語研究——この物語はいかに愛されたのか——」（於愛媛大学教育学部）において、コメンテーターとして発言した内容をもとに大幅に手を加えて成稿としたものである。

——せのお・よしのぶ、広島大学大学院文学研究科助教授——